

## 清朝紅銭の満洲文字

中村雅之

清朝乾隆年間以降、西域の地(現在の新疆ウイグル自治区)で漢字・アラビア文字・満洲文字の3種が記された貨幣が発行された。本土のものと同様に穴あきの銅銭であるが、赤茶けた色をしていることから一般に「紅銭」と称される。

紅銭の文字のうち漢字はもちろん漢語を記しており、アラビア文字は当地の主要な住人であるウイグル人の言語(すなわちウイグル語)を記している。それでは満洲文字は満洲語を記しているのかと言えば、なかなかそうとは断言しにくい。むしろ漢語音を記したものと考えたいような特徴を持っている。

以下、紅銭のいくつかを紹介しつつ、満洲文字の表記について考えてみたい。紹介するのはいずれも古代文字資料館の管理している資料である。

### (1) ウージー銭(直径 25.04 mm、厚さ 1.51 mm、重さ 4.4 g)

古銭収集家の習慣に従い、「ウージー銭」と呼んでおく。「ウージー」は漢字では「烏什」と表記される。アラビア文字部分は「ウージー」に当たるはずであるが、よく読めない。「WSY」のように見える。左の二重線が補助記号ダマに当たるとすれば、「ūsi」ということになるだろうか。満洲文字は「uši」とあり、一般の漢字表記と一致する。特に「ši」は満洲語の表記には通常用いられず(「si」で足りる)漢語音節(ピンインの shi)の表記に見えるものである。したがってこの地名の満洲文字表記は漢字の発音を表記したものと考えられる。

### (2) ヤルキム銭(直径 24.73 mm、厚さ 1.76 mm、重さ 4.5 g)

「ヤルキム銭」も古銭収集家の呼称に従ったもの。はたして「ヤルキム」の呼び名が何に由来するかは不明。漢字では「葉爾奇木」と記されることが多い。ヤルキム局は1760年の開局で、新疆紅銭の中で最も古い。

アラビア文字部分は「Y'RKND (= yarkand)」と読むことができ、ウイグル語でのこの地の呼び名「ヤルカンド」である。満洲文字は「yerkim」とあり、ウイグル語とは音形が異なり一般の漢字表記「葉爾奇木」とよく合う。なお、仮名で表記するとすれば、漢字によるにせよ満洲文字によるにせよ「イェルキム」が最も近い。

18世紀前半に満洲人トゥリシェンによって著された『異域録』(満洲語本と漢語本がある)には、この地の名が地図と本文とに見えるが、本文では満洲文字「irkin」漢字「伊爾欽」とあり、地図では満洲文字「yerkim」漢字「伊爾克木」とある。(今西春秋『校注

異域録』天理大学おやさと研究所 1964 による) 地図での呼称はヤルキム銭の満洲文字に一致する。問題はなぜ『異域録』の本文で「irkin」と満洲文字表記されたかであるが、これはおそらく漢字音によって表記したことによるものと考えられる。すなわち、「伊爾欽」をまず漢語音で読み、次に満洲文字でそれを表記して「irkin」としたものとする。漢字表記としては、「伊爾欽」も「伊爾克木」もおそらく清史稿の「葉爾奇木」などと同じく「yerkim」のような音形を意図した表記なのであろうが、それに対応する満洲文字表記が異なるのは、本来意図した音形を意識せず(つまり満洲語としての固定した音形がなく)、漢字表記とその漢字音を参考にしたことを示唆する。なお、「伊爾欽」「伊爾克木」「葉爾奇木」などが同じ音形を意図した表記だということについては「-m」韻尾の問題と尖団の区別の問題がかかわり、話が微細な部分に入るので今は深く立ち入らない。

(3) ヤルカンド銭(直径 26.18 mm、厚さ 2.46 mm、重さ 7.8 g)

「葉爾奇木局」は開局の翌年(1761 年)には「葉爾羌局」と改名する。後者を古銭収集家は通常「ヤルカンド局」と称する。この局で発行されたものは、漢字とアラビア文字は「ヤルキム銭」と同文で、満洲文字は「yerkiyang」とある。「葉爾羌」の漢字音を表記したのと考えて差し支えない。

(4) クチャ銭(直径 40.77 mm、厚さ 3.11 mm、重 23.2 g)

アラビア文字は「KWJ」と表記されており、「kuča」を意図した表記と見なしてよい。満洲文字は「kuce」と記され、漢字表記「庫車」の漢字音を表記したのと考えられる。

(5) アクス銭(直径 24.99 mm、厚さ 1.44 mm、重さ 4.1 g)

アラビア文字は「'QSW(=aksu)」、満洲文字は「aksu」と読める。ただしアラビア文字で「Q」の点が(3個余分に)5個記されていることの意味は不明。



ウージー銭



ヤルキム銭



ヤルカンド銭



クチャ銭



アクス銭